ホラー映画から見る日米の恐怖感覚
――日本版『リング』とハリウッド版『ザ・リング』との対比から――

社会学部４年　吉　本　真祐奈

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　日・米ホラー映画史
　1　怪談映画のホラー映画
　2　米国のモンスター映画
Ⅲ　宗教と恐怖～“恐怖”とは何か～
Ⅳ　近年のアメリカ・ホラー映画
Ⅴ　『リング』について
　1　『リング』とは何か
　2　作品内容
　3　リングの魅力～ニュー・ホラーの確立～
Ⅵ　ハリウッド版『ザ・リング』について
　1　『ザ・リング』概要
　2　メディアを用いた現代ホラー
Ⅶ　ジャパニーズ・ホラーをリメイクする理由
　1　『リング』が受け入れられた理由
　2　低予算製作
　3　現代アメリカ社会
Ⅷ　おわりに

Ⅰ　はじめに

近年ハリウッド映画では作品のつくり直し「リメイク」が多く見られる。中でもホラー映画の分野では日本のホラー映画がたびたびリメイクされている。2002年に日本でもヒットしホラーブームをおこした『リング』（1998年，中田秀夫監督）のリメイク版の『ザ・リング』（ゴア・ヴァービンスキー監督）が公開され，興行収入１億3000万ドルを超えヒットした。

この成功を機に『仄暗い水の底から』（2002年，中田秀夫監督）が，『ダークウォーター』（04年，ウォルター・サレス監督），『ザ・リング』の続編『ザ・リング２』がオリジナル版の監督中田秀夫が抜擢され公開，『呪怨』（2002年，清水崇監督）を，『スパイダーマン』シリーズの監督サム・ライミの製作でリメイクした。また『感染』（2004年，落合正幸監督），『予言』

（2004年，鶴田法男監督），『着信アリ』（2004年，三池崇史監督），『回路』（2001年，黒沢清監督）などもリメイクが決定している。

日本のホラー映画の独特の怖さがアメリカ人には新鮮で，それがきっかけで日本のホラー映画が注目され評価を得ていると聞いた。しかし，日本には古くからホラーという文化が盛んで，妖怪や怪談ものというものは昔からある。日本のホラーが新鮮に感じたのならば，なぜ妖怪や怪談ものには注目しないのだろうか。『リング』という作品がなぜ欧米でも受け入れられたのか。

本稿では日本版『リング』とハリウッド版『ザ・リング』を比較し，日米の恐怖感覚の相違を明示し，「ジャパニーズ・ホラー」とは何なのか論じていく。

Ⅱ　日・米ホラー映画史

ここ数年「ジャパニーズ・ホラー」という言葉で日本のホラー映画が世界から注目されているようだ。日本のホラー映画は，ここ数年で突如現れたわけではない。昔からホラー映画は存在していたわけだが，なぜ「ジャパニーズ・ホラー」と称され注目を浴びるようになったのか。まずはじめに，日本のホラー映画とは何なのか，その歴史を振り返ってみる。

1　怪談映画のホラー映画

戦前，日本のホラー映画とは怪談映画のことをさしていた。そのルーツは民間伝承の怪異話，『今昔物語』『今昔著聞集』といった説話集，能，歌舞伎といった演劇，講談，落語といった語り物の芸能にある。これらの怪談話の多くは因果と輪廻を説き，仏教の教え，信仰と結びつく内容となっていた。

江戸時代後期から，人間関係の衝突，軌轢を原因とする殺人，暴行，そして被害者が亡霊となって血みどろの復讐を遂げるという淫靡，凄惨な世界が競って作り出されていた。描写・演出が念入りになされ，そのため見聞きするものはぞーっとなり，暑い盛りには絶好の消夏法とされるようになった[1)]。

その伝統が映画界に持ち込まれて，長い間怪談映画は夏のものと見られていた。怪談映画の代表作が鶴屋南北作の『東海道四谷怪談』，圓朝作の『真敬累ヶ淵』と『怪異談牡丹燈篭』，『番町皿屋敷』そして怪猫映画である[2)]。

『東海道四谷怪談』ではお岩が夫の伊右衛門に毒を飲まされ，醜い顔になって狂い死にし，『累ケ淵』でも妖艶な豊滋賀が若い情人新吉に嫉妬したあげく，醜い顔となって悶死する。そして，お岩，豊志賀は怨霊となって，不実な夫，情人にとりつき苦しめるのだ[3)]。彼女たちは決して自ら襲ったりはせず，ただひっそりとただずんだり，相手に憑依することで相手を苦しめるのだ。

物語は勧善懲悪で構成されており，愛と憎悪が引き金となって怪異現象がおきる。また，愛するものに虐げられた女性，裏切られた女性が亡霊となって出現する場合がほとんどなのが怪談映画の特徴でもある[4)]。幽霊の出現に至る因縁話と幽霊の出現時における凄みのきいたところが見せ場であり，幽霊の醜い顔といったグロテスクなメイキャップで見るものに恐怖を感じさせる[5)]。

これらの怪談映画は戦後 GHQ の支配下で一時期姿を消すが，1960年代に入るまで恐怖映画として作られていた。また，怪談映画のほとんどが時代劇であり，現代に設定を変え作られるということはあまりなかったのである。それは，原作が江戸時代を舞台にしており，また男尊女卑の概念が今日の目で見ると不自然なほどに強調されているからであろう[6)]。

怪談映画は60年代以降西洋の SF やホラー映画が輸入されるようになり，数は減少していった。しかし，全く姿を消すわけではなく，何本も同じ題材で怪談映画は作られ，90年代以降も『忠臣蔵外伝四谷怪談』（1994年，深作欣二監督），『OTUYU　怪談牡丹燈篭』（1998年，津島勝監督），『怪談』（2007年，中田秀夫監督）とあり，現代においても怪談映画は健在なのだ。怪談映画こそ日本のホラー映画で「ジャパニーズ・ホラー」と言われるべきものではないだろうか。

しかし，かつて怪談映画が海外配給されたのはせいぜい東南アジア止まり

で，欧米諸国ではほとんど受け入れられなかった[7]。文化の違いのせいだろうか。しかし，時代劇でも『七人の侍』（1954年，黒沢明監督）が『荒野の七人』（1960年，ジョン・スタージェス監督）とアメリカではリメイクされている。文化が異なってもリメイクは可能なのである。

2　米国のモンスター映画

そもそもアメリカではどのようなホラー映画が作られ好まれてきたのだろうか。アメリカのホラー映画の歴史を振り返ってみたい。

欧米のホラー映画のはじまりは，やはりモンスター映画である。『ドラキュラ』『フランケンシュタイン』『狼男』がモンスター映画界の三大スターである。『魔人ドラキュラ』（1931年，トッド・ブラウニング監督），『フランケンシュタイン』（1931年，ジェームズ・ホエール監督），『狼男』（1941年，ジョージ・ワグナー監督）とハリウッドでデビューして以来現在に至るまで，この三大スターをテーマにした作品は多く作られてきた。

吸血鬼ドラキュラは美女の生き血を吸う吸血鬼ドラキュラ伯爵と人間との戦いを描いた作品である。古くから伝わる西洋の民間伝承にあり，イギリスの作家ブラム・ストーカーが『吸血鬼ドラキュラ』（1897年）を著し一躍有名となった。吸血鬼ドラキュラは十字架をかざされることに弱い。この設定からわかるように悪魔を描いた物語なのである。

フランケンシュタインはドラキュラと違い超自然の話ではなく科学の悲劇を描いた作品である。フランケンシュタインの原作はメアリー・シェリーの著した小説『フランケンシュタイン，すなわち現代のプロメシュース』である。天才科学者フランケンシュタインが死体を組み立てて誕生させた人造人間が自分の運命に嘆き苦しみ，創造者のフランケンシュタインに復讐を果たすといったストーリーである。

映画『フランケンシュタイン』は原作とは少々ストーリーが異なる。人造人間に埋め込まれた脳は狂人の脳で，それゆえ無差別に人々を次々に襲い，最後には人々の手により滅びてしまうというものだ。どちらにせよ，『フラ

ンケンシュタイン』は「過度の科学の追及が，人類を不幸に追いやるだろう」という科学批判をテーマにした作品であった[8]。

モンスター映画はモンスターが人々を襲う恐ろしさを描いたもので，またモンスターを滅ぼすため人々は戦うというのが特徴である。日本の怪談映画では動物の怪異話でも女性が化けたりするが，モンスターはみな男性である。

このように，日本と欧米では化け物の性別から描かれる恐怖の視点が全く異なるのである。異なる点を大きくわけると，第１に怨霊と悪魔の差異，第２にそれらと戦うか戦わないかの違いになると思われる。人間の感じる“恐怖”という同じテーマで作られるホラー映画はなぜここまで国により異なる点が生まれるのだろうか。

Ⅲ　宗教と恐怖～“恐怖”とは何か～

そもそもテーマである人間の感じる“恐怖”とは何か。

恐怖には「目に見える恐怖」と「目に見えない恐怖」がある。前者は身体が苦痛を予期して避けようとするために起こるもので，これらの恐怖は何らかの対処により回避することが可能である。後者は未知に対するものへの恐怖である。

恐怖の経験には典型的な学習過程が見られ，脳は過去の事例を手がかりに不確かな未来を予測しようとする[9]。しかし，未知なものに対しては予測ができず恐怖を感じる。人間にとって未知なる恐怖とは，地震や噴火といった天災，また科学・医療技術が発達していないころは病気，そして究極の未知は死である。この未知なる恐怖に対して私たち人間は「宗教」により回避してきたのである。

つまり，恐怖こそが宗教の始まりなのである。未知なる恐怖は悪魔や怨霊の仕業とし，神に対する信仰によりその恐怖を回避していた。一神教，多神教，キリスト教，イスラム教，仏教など多様に存在する宗教の中で，悪魔や怨霊と置き換えられる未知なる恐怖も多様に存在する。

悪魔は，キリスト教を代表する一神教世界に存在するものである。ここでは悪魔とキリスト教について深く言及しないが，悪魔は中世ヨーロッパの魔女狩りに代表されるように，戦い撃退しなければならない存在なのであろう。そのため，欧米のホラー映画では主人公はモンスターという悪魔と戦うのである。

他方，日本の怪談映画に登場する怨霊が人々を苦しめる行為は「祟る」という行為と関連しており憑依なども，やはりシャーマニズム，神道から由来するものである。このようにその土地の宗教により未知への恐怖の対象も異なるのである。現代の日本では神というものをもたないがため，宗教の壁というものが存在せず欧米のホラー映画も娯楽映画の一環として楽しむことが出来るのだ。

しかし，欧米には神は存在し宗教の壁が存在するため，日本の怪談映画が理解しにくいのだろう。怪談映画に登場する怨霊はモンスターのように直接人を襲うわけでもなく，また人間も怨霊には勝つことができない。論理的ではなく，曖昧なため理解に苦しみ，欧米では怪談映画が受け入れられないのである。その証拠として，人々を襲う怪獣映画『ゴジラ』はモンスターであり悪魔的であるため欧米でも大変人気がある。『GODZILLA（ゴジラ）』（1998年，ローランド・エメリッヒ監督）がアメリカでリメイクされたのは記憶に新しい。このように，ホラー映画は宗教と非常に密接な関係がある。国を超えて理解しようとするのは容易ではない。しかし，「ジャパニーズ・ホラー」はこれらの壁を難なく越えてしまったのだ。

Ⅳ　近年のアメリカ・ホラー映画

その前に，アメリカのホラー映画ではドラキュラといったモンスター映画以降どのような歴史を刻んできたのだろう。『リング』がリメイクされるまでのアメリカのホラー映画を振り返ってみよう。

ホラー映画はモンスター映画として人気を博していたが，現代のホラー映

画のスタイルを確立したのは，1970年代に入ってからである。ベトナム戦争開戦後1970年代にアメリカを中心として，ホラー映画ブームが起こった。神父と少女にとりついた悪魔の壮絶な対決を描いた『エクソシスト』（1973年，ウィリアム・フリードキン監督）や，ホラー映画では欠かせない存在となった，死者がよみがえり人々を襲う『ゾンビ』（1978年，ジョン・A・ロメロ監督）もこの頃誕生した。その他，『悪魔のいけにえ』（1974年，トビー・フーパー監督），『オーメン』（1976年，リチャード・ドナー監督）など70年代では次々とホラー映画が公開された。

これらの作品の特徴はグロテスクな描写である。その後，グロテスクな描写で恐怖心をあおるというのがホラー映画の主流となる。映画技術の進歩も伴いグロテスクな描写はますます過激になり，80年代に入り怪物ジェイソンがチェーンソーで人々を襲う『13日の金曜日』（1980年，ショーン・S・カニンガム監督）が大ヒットする。また，怪物フレディーが夢の中で若者を次々と殺害していく『エルム街の悪夢』（1984年，ウェイス・クレイブン監督）も大ヒットする。

これらの作品は，多量の血・過激な暴力・殺害シーンの生々しさなどが特徴でスプラッター（スラッシャー）映画とよばれ，80年代はスプラッター映画ブームとなった。

冷戦が終わり90年代に入りこれらのスプラッター映画は廃りだす。天才精神科医レクター博士が登場し猟奇殺人の犯罪心理に迫るサイコ・サスペンス映画『羊たちの沈黙』（1990年，ジョナサン・デミ監督）がヒットした。70～80年代では，人間でない怪物・化け物がホラー映画の主役だったが，冷戦後は主役が人間にシフトし，猟奇殺人，犯罪心理を題材にした作品が多く作られたのである。

また，手持ちカメラで撮影された魔女伝説の真相に迫る若者たちの恐怖を描いた異色擬似ドキュメンタリー映画『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』（1999年，エドゥアルド・サンチェス，ダニエル・マイリック監督），第六感を持った少年を描いた『シックス・センス』（1999年，M・ナイト・シャマ

ラン監督）など心理恐怖を重点においた作品も多く目立ち，90年代はホラー映画が様々な分野に及び，単純な分類が困難になっていった。

2000年代に入り同時多発テロ９・11が起こる。ホラー映画界では90年代の流れを残しつつ，かつて流行したホラー映画『オーメン』（2006年，ジョン・ムーア監督），『テキサス・チェンソー（悪魔のいけにえ）』（2003年，マーカス・ニスペル監督）などリメイク作品が多く出た。そして，リメイク作品は日本のホラー映画にも及び2002年に『ザ・リング』が公開されヒットし，「ジャパニーズ・ホラー」が注目をあびるようになった。

モンスター映画を基盤とした欧米のホラー映画はゾンビや殺人鬼などニューヒーローを次々と生み出していった。また，グロテスクな描写で恐怖心をあおる方法で私たちを恐怖のどん底に落としていき，ホラー映画界をリードしていった。そんな彼らが，なぜ「ジャパニーズ・ホラー」に心を奪われてしまったのだろうか。

Ⅴ　『リング』について

１　『リング』とは何か

『リング』とはモダンホラーとしてベストセラーを記録した鈴木光司原作のホラー小説である。1991年に文庫本で発売され，口コミで「怖い小説がある」と噂が広がり人気をあつめる。『リング』『らせん』『ループ』『バースデイ』と４作品のシリーズとなっている。４作品で累計約800万冊を売り上げ記録的なヒットとなった。

そして，1998年に映画化され全国劇場公開された。日本ホラー映画としては驚異的な配給収入10億円とヒットし，その後『リング２』（1999年，中田秀夫監督）『リング０　～バースデー～』（2000年，鶴田法男監督）とシリーズ公開されていった。また映画にとどまらず，テレビドラマ化，漫画化など『リング』の世界は広がり日本中「リング」ブームを巻き起こしたのである。

2　作品内容

原作小説と映画とは作品内容が異なる。本題では映画のみに焦点をあて論じていきたい思う。

「見たら一週間後に死ぬ」という呪いのビデオの噂が子供たちの間で飛び交う。噂の取材をしていたTVディレクターの玲子（松嶋菜々子）の親戚の娘・智子がなぞの死をとげてしまう。同日，同時刻に智子のクラスメイト３名も死を遂げていた。彼女たちが噂のビデオを見ていたという情報を掴んだ玲子は，その真相を突き止めようと動き出す。そして，呪いのビデオを見つけ出した玲子は自らビデオを鑑賞し，見終えた直後にかかってきた電話に死の宣告を受けてしまう。自分の顔を写真に撮ると不気味に歪んで写し出される。

どうやら呪いは本当だと確信した玲子は，元夫の竜司（真田広之）に助けを求める。竜司は超能力を持っており，ビデオの映像はある女の怨念による念写であることを突き止める。その女とは千里眼という不思議な力を持っていたため，人々から恐れられ自殺した山村志津子の娘・貞子であった。貞子もまた母の血を受け継いだため，井戸に突き落とされ殺されていたのである。

謎が徐々に解明されていくなか，玲子と竜司の子供・陽一もビデオを見てしまう。運命に嘆き悲しみながらも玲子は，貞子の遺体を井戸からあげてやることで呪いが解けることを突き止める。玲子がビデオを発見した伊豆のロッジに井戸はあった。死までの時間が迫る中，玲子は井戸に潜り貞子の亡骸を救い出し，無事死から免れることができた。

ところが，東京に戻った竜司は自宅で突然なぞの死を遂げてしまったのだ。貞子の呪いはまだ解けていなかったのだ。呪いのビデオをコピーし他人に見せることで死を免れる事ができるのであり，玲子は竜司にコピービデオを見せていたため助かったのだ。そして，息子の陽一の呪いを解くため玲子は，自分の父親にコピービデオをみせにいくのである。

3　リングの魅力～ニュー・ホラーの確立～

この映画の魅力はホラー映画なのにストーリーが綿密でおもしろい，そして本当に怖いという点である。前半のビデオテープによる怪奇話，そして後半の謎解きという構成で95分と映画にしては短い上映時間の中で，十分にストーリーが綿密に構成されている。その中で，この映画はホラーなのだから怖がらせることも行われるのだが，単なるホラー映画ではなく非常にエンターテイメント性にあふれる作品なのである。それが，この映画が流行した理由なのではないだろうか。

この映画が本当に怖いと感じる理由として，「ビデオテープ」と「暗闇」と「どんでん返し」の３点があげられるだろう。ビデオテープをたまたま見ただけで死に至る。この理不尽さが恐ろしい。また，ビデオテープというどこの家庭にもある身近なものを用いることで，映画を見終えた後も恐怖を与えることができる。部屋にあるビデオテープを見るたび映画をいやでも思い出す，またこのビデオが呪いのビデオだったらどうしようなど勝手に想像してしまうこともあるだろう。

この映画はホラー映画にも関わらず流血シーンがない。流血シーンがないのにこの映画が怖い理由は暗闇の恐怖を十分生かしているからである。Ⅲ章でも述べたように私たちは未知のものに恐怖を感じる。先の見えない暗闇は本能で感じる恐怖なのである。映像が呪いのビデオ内に登場する井戸のように，終始薄暗いのである。この画面の薄暗さが作品全体を不気味な雰囲気に包んでいる。そして，ストーリー自体が井戸の中ように先の見えないものになっている。ビデオの呪いという井戸から抜け出すために奮闘し，やっと抜け出せると一安心したときに，最大の恐怖貞子が襲いかかるのである。「どんでん返し」である。

一番の恐怖シーンでストーリーの山場が，呪いが解けたと思った後に竜司が命を落とすシーンである。このシーンを説明すると，竜司が一人部屋にいると勝手にテレビがつき，画面に井戸の映像が映りだす。そして，その井戸の中から貞子が出てくる。髪で顔が覆われた不気味な女がゆっくりゆっくり

徐々にテレビ画面に近づいてくる。呪いが解けたはずなのにと，恐怖におびえる竜司。この近づいてくる貞子の動きが非常に不気味である。表現しにくいが肩や腕の関節をかくかく動かすのだ。そして，ついにはブラウン管の中から這い出てくるのである。ブラウン管から出てきた貞子は畳の上をゆっくり這って竜司に近づくのである。最後に髪に覆われていた顔から目だけが見え終わるのだが，これもとても恐ろしいシーンである。ブラウン管から貞子が出てくるシーンは映画史に残るものであろう。

長い黒髪の女幽霊は怪談映画に登場する女幽霊と似たようなものを感じる。しかし，ビデオテープを見ただけで縁もゆかりもない人間を襲う貞子は，特定の相手の前にだけ現れ襲う怪談映画の幽霊とはだいぶ異なる。日本のホラー映画に突如怪談映画と異なる『リング』が登場したのか。そうではない。その背景に心霊ものと呼ばれるホラー映画の存在がある。

心霊ものとは『ほんとうにあった怖い話』（1991年）を代表する，一般の人からよせられる実体験に基づく恐怖話を映像化したものだ。怪談のように特定の相手の前に恨みを持って現れるのでも，怪物のように暴れ回るものでもない，ただそこに起きる怪奇な現象や，幽霊の存在を描くだけといった内容であった[10)]。たまたま拾ってきたぬいぐるみに幽霊がとりついていた，いつもと違う道を通ったら幽霊に襲われたなど，心霊ものは生活に突如襲い掛かった恐怖を描いた作品なのである。『リング』でビデオテープを見ただけで呪われるという話は，この心霊ものからきたに違いない。

また，この心霊ものに登場するもののほとんどが幽霊のため，監督たちにとっていかに幽霊を怖く見せるかが最大の課題となるのだ。

『リング』の脚本を担当した高橋洋氏は「幽霊が怖いのは襲いかかってくるからではない。怖いのはそれがこの世のモノではないから，その一点につきる。生身の人間が演じるほかない幽霊からどうやって，“人間らしさ”を剥ぎ取るか。これが幽霊表現の最大の課題だ。」と語っている[11)]。

この課題を果たそうと中田氏と高橋氏は『リング』においてもかなりの奮闘振りをみせる。その結果が貞子登場シーンである。逆再生という手法で撮

影し，非人間的な動きを作り出し，また長い黒髪で顔を隠すことで彼らは課題である“人間らしさ”の排除に努めたのである。

それでは，怪談話でもなく欧米のホラー映画でもないニュー・ホラー『リング』はどのように海を渡ったのだろうか。

Ⅵ　ハリウッド版『ザ・リング』について

1　『ザ・リング』概要

ゴア・ヴァービンスキー監督により『リング』はどのように作り直されたのだろうか。監督は『ザ・メキシカン』(2001年)，『パイレーツ・オブ・カリビアン』シリーズ（2003年～）を手がけたハリウッドを代表する監督である。彼は「最も気をつけたことはオリジナルを台無しにしないことだよ。オリジナルの『リング』はすばらしい出来で，ゆえにインパクトの強いところは全部残すようにした。」と語っている[12)]。そのためストーリー展開・登場人物の設定（玲子はレイチェルに，竜司はノアに名称変更）などほぼオリジナル版と同じである。

また，この映画のヒロイン的存在である貞子も少女の「サマラ」として登場し（容姿も貞子と同様長い黒髪である），オリジナル版と同様井戸なども登場する。血の描写もなく，オリジナル版では独特の雰囲気を出していた画面全体の暗さも引き継がれている。また，恐怖シーンを際立たせるため特殊メイクを使用するなどハリウッドらしいアレンジもされている。

2　メディアを用いた現代ホラー

リメイク版で印象に残る場面をピックアップし，ゴア監督は『リング』をどのように解釈し描いたのか解説していく。

この映画の始まりは２人の女子高生の会話から始まる。会話内容は呪いのビデオの存在の有無や，１人がそのビデオを見てしまったというものである。リメイク版も同様に２人の女子高生の会話のシーンから始まるが，オリジナ

ル版と違い「テレビの電磁波で脳細胞が死ぬ」「テレビからどれだけの電磁波が出ているか」という会話がされ，そして呪いのビデオの存在の有無についての話になる。ただの女子高生の噂話のシーンで，テレビからの電磁波という取っ手つけたようなセリフに違和感を感じる。

そして，呪いのビデオを見たあとにレイチェルがマンションの窓から向かいのアパートを見る場面がある。アパートのどの部屋にもテレビがついており，レイチェルはその様子を冷ややかな目で見るのだ。また，オリジナル版では竜司の超能力を利用し，ビデオの謎解きに挑んでいるが，リメイク版では元夫・ノアには超能力はなく，映像に詳しいカメラマンという設定になっている。ビデオに映像が記録されるとカウンター表示されるが，呪いのビデオにはそれが表示されておらず，映像として記録されるのは不可解だと語るのである。ビデオの謎解き方法として，カメラの専門知識や新聞記事やインターネットなどを使いレイチェルは自らの手で事件を解決していく[13)]。

また，レイチェルが映像を調べていると，映っていたハエがブラウン管から抜け出すというシーンがある。仮想世界が現実世界を侵食することを提示するようなシーンである。オリジナル版ではビデオテープやテレビはあくまで貞子の呪いを増殖させる道具として用いられていたが，リメイク版ではそれが主軸となりビデオ・テレビというメディアを用いた現代怪奇話を綴った作品となっているのだ。

ゴア氏はビデオテープによる恐怖感染が『リング』の最大の魅力ととらえたのだ。また，謎解きによるストーリー展開，日常生活に潜むビデオテープ・テレビの恐怖，そして最後のどんでん返し，この 3 点が作品を支える軸となっていることもしっかりとらえている。ビデオテープによる恐怖感染がメインテーマであるため，『リング』の見せ場である最も恐ろしい貞子がブラウン管から出てくるラストシーンはオリジナル版と見せ方が異なる。

貞子と同様にテレビ画面の中の井戸からサマラは出てくるが，その動きは貞子より速く，あのかくかくと関節を動かすような動きはしない。ブラウン管から出て最初は床を這っているがすぐ直立する。そして，サマラはデジタ

ル画像のノイズが揺らいだように見え，一瞬動きがワープするのである。そして，ノアを追い詰めて終了するのである。

また，サマラが登場する予兆としてテレビのブラウン管から水が滴り落ちる。サマラは全身水浸しであり，井戸に落とされたゆえに，水のモンスターと化してしまった印象を受ける。ゴア監督は「僕は今回，テープの中の世界をテープの外に持ち込みたかったんだ。ビデオの中ではサマラは瞬間移動するわけだから，現実世界でも同時に移動できるんじゃないかって考えたんだよ。」と語っている[14)]。

オリジナル版では貞子の果てることない呪いの連鎖が最大のテーマだったが，リメイク版ではメディアによるウィルス感染というテーマに変わってしまった。山村志津子，貞子の千里眼，また竜司の超能力という設定が映画に不気味さを漂わせていたのだが，メディアによる恐怖を描きたかったために，ゴア氏はそこに価値をおかず削除してしまったのだ。アメリカのホラー映画にしては不気味さを漂わせる映画になっているが，やはりオリジナル版の方が強烈に不気味である。オリジナル版のような不気味さが排除され，また呪いというテーマもウィルスに置きかえた。彼らはジャパニーズ・ホラーをどう解釈したのか。そして，それが受け入れられヒットしたのはなぜだろうか。

Ⅶ　ジャパニーズ・ホラーをリメイクする理由

1　『リング』が受け入れられた理由

『リング』は，なぜ受け入れられヒットしたのだろうか。貞子が怪談映画の怨霊とは異なり因果関係がなくとも襲い掛かり，欧米的な悪魔・モンスターに近いものをもっていたからであろう。無差別に襲うさまは実に痛快である。貞子がモンスター的要素を持っていたところが，受け入れやすかった最大の要因の一つであろう。現代の日本を象徴するかの様に，宗教色や土俗的な文化色が感じられないことが幸いしたと考えられる[15)]。

また，どんでん返しのストーリーに彼らはとても驚愕したのである。Ⅲ章

でも述べたように欧米のホラー映画は怪物と戦うものなのである。怪物と戦うことで恐怖が取り除かれていき，事件の解決とともに映画も終了する。このストーリー展開がお決まりなのである。ちなみに，アメリカで先行上映がされた際，いったん事件が解決したかのように見えた場面で，観客の何人かは終わったと勘違いし席を後にしたという話もある[16]。このどんでん返しは日本人以上に彼らを驚かせ，また斬新なアイディアとして新鮮に感じ人気を呼んだのだろう。

そして，日本と同様でビデオテープを題材にした点である。これは，ゴア氏も一番食いついたところでもあるように，アメリカ人の心を一番掴んだものなのかもしれない。なぜならば，モンスターのように恐怖の対象を作り上げてホラー映画を作る欧米人にとって，身近なものに恐怖を与えるという発想は中々出てこないものなのである。テレビの中から化け物が出てきたことには，私たち日本人以上に驚いたに違いない。

曖昧性の排除，ストーリーのおもしろさ，身近なものの恐怖，これが『リング』がアメリカでも受け入れられ，人気となった理由であろう。

また，ゴア氏は「僕が目指したのは，その瞬間だけ怖いんじゃなくて，観客の脳に直接アクセスし，３日後も，寝ている間も焼きついているものなんだ。それには“現代的な恐怖”を扱うことだと思う。つまり，『どうして自分が？！』と人々に味あわせる感覚だね。いきなり自分が被害者になり得るというのは，９・11を事例に出すまでもなく，テロの時代の今なら誰もが扱っている恐怖だろう？それを日常生活に取り組んでいくのが効果的だと思ったんだよ。」とも語っていた[17]。

彼らのいうジャパニーズ・ホラーとは，身近なものが突如恐ろしいものに変貌する，日常生活に突如進入してくる恐怖のことではないだろうか。

2　低予算製作

日本人の視点から作られる怖さを新鮮に感じたのはわかるが，ただそれだけで次々とリメイクが決定するものなのだろうか。いや，リメイクにはおい

しい要素があるのだ。『ザ・リング』は4500万ドルというアメリカの基準では低予算で作られ，興行収入１億3000万ドルと高回収となり，ビジネス的に大変成功したのである。

もともとホラー映画はSF映画やアクション映画と異なり低予算で製作できる。リスクが低いため『リング』のリメイクは着手しやすかったと考えられる。少しリメイク権料は高いように思うが（『リング』のリメイク権料は100万ドル），十分採算の取れる巨大なハリウッド映画市場では安い買い物なのだろう。

また，近年はハリウッドでも，巨額の制作費を投じスターを起用した大作が当たるとは限らず，企画不足が悩みとなっているらしい。そのため，海外作品に目をつけているというのが現状である[18]。『リング』もバイヤーによりハリウッドに持ち込まれたのである。膨大な外国映画をチェックし，厳選した作品のリメイク権をハリウッドの映画会社に売り込む仕事が存在するのである[19]。

少しでもおもしろそうな映画はハリウッドでリメイクされる可能性は大きいのである。ハリウッド市場は私たちが想像する以上に貪欲なのである。

3　現代アメリカ社会

作り手側の意図はみえてきたが，見る側はどうなのだろうか。

ゴア氏が言うように，現代のアメリカ人の心には，いつ何が襲い掛かるかわからない恐怖というのが常に存在する。Ⅳ章で少し触れたが，アメリカのホラー映画はベトナム戦争，冷戦後など時代の変わり目とともに変化してきた。当時の社会情勢と人々の恐怖心はリンクしているのである。

９・11以降にジャパニーズ・ホラーのリメイクは始まった。関連性の真偽はわからないが，『リング』のプロデューサーでもある一瀬隆重氏は「92，93年ごろに『リング』の企画を米国に持っていった時には，ビデオを見たら人が死にだなんてハリウッドじゃ通用しないと，誰も興味を示さなかった。」と語っている[20]。

日常生活に突如入り込む恐怖を描くジャパニーズ・ホラーを怖いと感じるのは，現代のアメリカ人が抱く恐怖心を投影しているのではないだろうか。9・11がなければジャパニーズ・ホラーがアメリカでヒットしなかったのではないだろうかと私は考える。

Ⅷ　おわりに

ジャパニーズ・ホラーが海を渡り成功したのは，作品としてのすばらしさ，ハリウッドの貪欲さ，9・11以降のアメリカ人に植え付けられた恐怖心，これらすべての要因が重なったためであろう。しかし，これはあくまでリメイクでの成功である。日米間の恐怖感覚，文化の違いはある程度は超えられるが，『リング』のようにアメリカ人がオリジナルを元にアメリカ映画として作り直さなければ伝わらないものだろう。

しかし，『ザ・リング』の後『呪怨』のリメイク版『The Grudge』（2004年）がオリジナル版の清水崇氏が監督をし，初登場全米１位を獲得するという快挙を成し遂げた。日本人監督が全米１位に輝いたのは初のことであった。また，この作品の舞台はアメリカではなく日本であり，日本人俳優も数名出演している。わざわざアメリカ映画にリメイクしなくとも，十分伝わることが証明された。リメイクという手法をとるのはアメリカの意地なのではないだろうかと私は考える。

ジャパニーズ・ホラーにより日本映画が今まで開くのに困難であったハリウッドの扉を開いたのである。中田氏，清水氏にはハリウッドから監督のオファーが殺到しているらしい。アニメ，ゲームに続き日本映画が世界を席巻する日もそう遠くはない。

＜注＞

１）北島明弘「日本の怪談映画の主役は幽霊・妖怪たち」『別冊太陽　日本恐怖（ホラー）映画への招待』平凡社，2000年，18頁。

2）北島，前提書，19頁。
3）北島，前提書，19頁。
4）北島，前提書，19頁。
5）北島，前提書，19頁。
6）北島，前提書，18頁。
7）鶴田浩司「Jホラー映画事情　日本ホラー映画は何故注目されているのか」『キネマ旬報2005年2月上旬号』キネマ旬報社，159頁。
なお，例外として，映画『怪談』（65年，小林正樹監督）というカンヌ国際映画祭審査員特別賞受賞，米アカデミー賞外国語映画賞ノミネートした作品がある。『怪談』は欧米に渡り評価されたが，その後怪談映画が欧米で人気を博したわけではないため，ここでは省略した。
8）「恐怖の歴史」6，三大スター。
http://www.t3.rim.or.jp/~miukun/kyoufu.htm#6
9）ラッシュ・ドージアJr.（桃井緑美子訳）『恐怖　心の闇に棲む幽霊』角川春樹事務所，1999年，177頁。
10）鶴田浩司，前提書，159頁。
11）高橋洋『映画の魔』青土社，2004年，35頁。
12）佐藤友紀「ザ・リング」『キネマ旬報2002年11月下旬号』キネマ旬報社，47頁。
13）映画の精神医学「ザ・リング」
http://www.kabasawa.jp/eiga/other_films/2002/ring/ring.htm
14）佐藤，前提書，48頁。
15）鶴田，前提書，160頁。
16）山口直樹「都市伝説と現代生活　日本版を踏襲し，生まれ変わった恐怖《ホラー》」『キネマ旬報2002年11月下旬号』キネマ旬報社，50頁。
17）佐藤，前提書，48頁。
18）「仕掛け人が語る，Jホラー快進撃の秘密」
http://database.asahi.com./library/power/p-detail.php
19）ライアン・モテシェアド「Jホラーを売り込むリメーク王」『Newsweek』　第978号2005年11月2日，58頁。
20）「Jホラー映画，人材も世界へ　プロデューサー―瀬隆重（ヒットを語る）」『日経テレコン21』
http://telecom21.nikkei.co.jp/nt21/service/CMN1000/ATCD242?cid=NIRKDB200

＜参考文献＞

石田一『図解ホラー・シネマ　銀幕の怪奇と幻想』河出書房新社　2002年
鬼塚大輔「デフォーム/リアリティを喪失した肉体」『アメリカ映画主義　もうひとつの USA』フィルムアート社　2002年
鬼塚大輔「日本の恐怖が，世界中に連鎖する！」『日本発　映画ゼロ時代　新しい J ムーヴィーの読み方』フィルムアート社　2006年
川崎公平「人間ならざる人間　ジャパニーズ・ホラーと恐怖漫画の可能性」『映画の恐怖』青弓社　2007年
香山リカ「日・欧の幽霊観」『別冊太陽　幽霊の正体』平凡社　1997年
北島明弘「日本の怪談映画の主役は幽霊・妖怪たち」「怪談映画からニュー・ホラー映画へ」『別冊太陽　日本恐怖（ホラー）映画への招待』平凡社　2000年
佐藤友紀「ザ・リング」『キネマ旬報2002年11月下旬号』キネマ旬報社
高橋洋『映画の魔』青土社　2004年
田中貴子「女性の幽霊が多いのはなぜか」『別冊太陽　幽霊の正体』平凡社　1997年
鶴田浩司「J ホラー映画事情　日本ホラー映画は何故注目されているのか」『キネマ旬報2005年 2 月上旬号』キネマ旬報社
永田よしのり「リングシリーズとは」『別冊太陽　日本恐怖（ホラー）映画への招待』平凡社　2000年
ライアン・モテシェアド「J ホラーを売り込むリメーク王」『Newsweek』　2005年11月 2 日
ラッシュ・ドージア Jr 桃井緑美子訳『恐怖　心の闇に棲む幽霊』角川春樹事務所　1999年
山口直樹「都市伝説と現代生活　日本版を踏襲し，生まれ変わった恐怖《ホラー》」『キネマ旬報2002年11月下旬号』キネマ旬報社

＜インターネット・サイト＞

映画の精神医学「ザ・リング」
http://www.kabasawa.jp/eiga/other_films/2002/ring/ring.htm
日経テレコン21「J ホラー映画，人材も世界へ　プロデューサー一瀬隆重（ヒットを語る）」
http://telecom21.nikkei.co.jp/nt21/service/CMN1000/ATCD242?cid=NIRKDB200
フリー百科事典ウィキ・ペディア「リング（ホラー）」概要
http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%B0_%28%E6%98%A

0%E7%94%BB%29

＜映像資料＞

『リング』東宝「リング」「らせん」製作委員会1998年
『ザ・リング』アスミックエース2002年